

artins
asuko

チコ・スティーブンス



ふたりのたぬきのおはなし

attina
asuko
ま

もみじの国のまんなかで、

東の丘にくらしていました。

たぬきのキーリーは、

自分とおそろいのしっぽを待ちながら。

西の浜辺から吹いてくる、

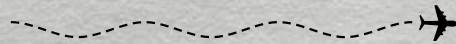
ひんやり、しょっぱい海藻の風。

どこまでも歩けるあの海を、

彼女はずっと恋しく思っていました。



恋しさは募り、やがてあふれきり、
 心が呼ぶ「帰る場所」へと、しっぽから跳びました。
 おまんじゅうみたいにやわらかく、まるい
 うさぎのチャイといっしょに、
 キーリーは飛行機に乗り、沈む夕日を追いかけてました。



そのころ、
 たぬきのツグは
 たぬきの国
 から、もみ
 じの国へと
 引越して
 いました。
 でも、彼の
 おはなしは
 ーまたあ
 とで。



ツタにからまり、ころころ転び、

スキーでもつまずきながら、

それでも全身全霊で探しつづけました。

あのやっかいな「おそろいのしっぽ」を。
そしてついに、

新しい人生のしごとを

始めることにしたのです。





冬のおわりのある日、
湾のちかくの通りで、
ツグという旅人が
ふらりと歩いてきました。
日本から来た、冒険好きなたぬき。
ふたりは小さなタコと、
おすしの巻きものを分けあいました。

やがて雨粒が落ちはじめ、
たぬきたちは車で入り江へ向かいました。
海沿いの道は、

お城に魔法をかけられたような場所。

「きつとすぐ雨はやんで、

なかよくなれるはず」

——そう思ったのに、

雨は降りやまず、

かわいそうなキーリーは

もうお手上げでした。

たぬきたちが出会った

バンクーバー島では、

気候はおだやかで、

激しい雨はめったにありません。

そのとおり、雨はやみました。

けれど今度は、

みぞれがしんと降りはじめ、

やがて一面が

白い雪におおわれたのです。



入り江に着くころ、

雪は大地にふんわりと積もっていました。
それでも、ふたりの歩みは止まりません。
つるつるすべる氷の上を進み、

入り江と海のあいだへ――

そこは、ふたりにとつての
新しい樂園だったのです。

小道の途中で、

ていねいに彫られた流木を見つけました。
カラスや、ほかの生きものたちが、
まるで空に舞っているかのよう。

キーリーは、うれしそうに

ひとつひとつ指さしては、

はしゃいでいました。

けれどツグの写真に写っていたのは、
大切なその作品よりも、

いつだってキーリーだったのです。

キーリーは大よろこび。

ツグはその写真を、そつと彼女に渡しました。

するとキーリーの胸の奥で、
小さなきらめきが

やさしく育ちはじめたのです。

チャイもこくりとうなずき、

その友だちを認めました。

けれどまもなく、

ツグは旅立つことになり、

ふたりの時間は

いったん終わりをむかえました。





ふたたび出会ったとき、
ツグには伝えたいことがありました。

友情以上の想い――

ふたりは運命のつがいだと。

キーリーは少しためらいました。

自由で、しあわせな日々を

楽しんでいたからです。

けれど離れてみてこそ、

距離が、

彼女の本当の気持ちをは

そつと教えてくれました。

ついにふたりは再会し、
海辺を歩きつづけました。
月が「もうおしまい、もうおしまい！」
と言うまで、
笑い声は止まりません。
そんな中、ツグは胸いっぱいに
想いを伝えました。
「日本へいっしょに行かない？
ぼくと冒険しよう！」



キーリーはぱちり、ぱちりとまばたきをして、
それから、こくりとうなずきました。
チャイがそばにいるのを感じながら、
勇気を出して言ったのです。
「もし日本が『おうち』なら、
わたしはそこに行く。
だって、あなたがいる場所が
わたしの帰る場所、
あなたこそが、
わたしの『おうち』だから。」

ノートパソコンに、毛布と本、

コートにミトン、ペンとおはし。

たいせつなものをぎゅっと詰めて、

雲をこえ、

青く広がる海をわたり、

飛行機で旅立ちました。

たどり着いたのは、

たぬきの国。

そこではふたり、

思うままに歩き、

本当の冒険が

はじまったのです。



春のある朝、

伊東の桜空の下で、

ツグは目をきらりと光らせながら、
キーリーのほうを向きました。

「結婚してくれる？」

そうたずねると、

キーリーの胸は

喜びでいっぱいになりました。

その瞬間――

キーリーのしっぽが

ぽこん！と飛び出しました。

「もちろん！」

そう笑って、

明るくほほえんだのです。



なんてすてきな結婚式でしょう！
場所は——鹿島神宮。

きつねまでやって来るほど、

たくさん動物たちが集まりました。

友だちや家族に囲まれて、

蝶ネクタイをつけたチャイもいっしょ。

やさしい風が吹きぬける庭園に、

みんな、うつとりと見とれていたのです。





でも、このおはなしは
まだ終わりではありません——
いいえ、まだまだ。

だって、ひとつ

忘れてはいけないことが
あるのです。

とびきりすてきな結婚式が

ひとつあるなら……

もっとすてきなのは、なあに？

そう——

ふたつです！



やがてふたりは、
あの遠い海辺へと帰ります。
冒険が生まれる、
もみじの国のまんなかへ。
日本に來られなかった
家族や友だちといっしょに、
もう一度、お祝いを。
キーリーとツグ、そしてチャイ——
手を取りあつて。



行きたいんだけど、その日ちょうど眼科があつてさ。
みんなで楽しんでね！



やがてふたりは、

あの遠い海辺へと帰ります。

冒険が生まれる、

もみじの国のまんなかへ。

日本に來られなかった

家族や友だちといっしょに、

もう一度、お祝いを。

キーリーとツグ、~~キーリーとツグ~~——

手を取りあつて。



めでたし、めでたし。



バンクーバー島沖の、
とある秘密のビーチから
ご挨拶を送ってくれた
エマーソンに、
心より感謝を込めて。